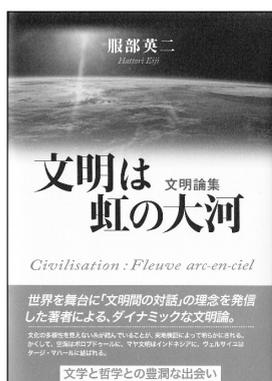


服部英二著 『文明は虹の大河』——服部英二文明論集

麗澤大学出版会、二〇〇九年六月

岩澤 知子



本書は、二十一年間にわたるパリのユネスコ本部勤務ののち、現在、比較文明学者として「文明間の対話」の理念を国内外に向けて強く発進し続ける服部英二氏のこれまでの活動と思想を辿るダイナミックな文明論集である。

本書を貫くテーマをまず象徴的に示すのは、著者自らの深い想いが込められたタイトルであろう。『文明は虹の大河』というこの示唆に富んだタイトルは、いったい何を意味するのか。その命名の由来を、服部氏は冒頭で次のように語っている。「果てしない漆黒の宇宙に浮かぶ一つの青い惑星を虹の大河が取り巻いている。文明という虹の大河である。……虹がその七色を混濁することなく、まさにその故に光あるその姿は、多様性を生きたる文明そのものの姿である」。氏の従来の主張であり、ユネスコの「文化の多様性に関する世界宣言（二〇〇一年）」にも盛られた重要な認識——「自然界に種の多様性が不可欠な如く、人間の生存にとって文化の多様性は不可欠である」——は、他でもないこの「虹」

という表現の中に込められている。だが、この「文明という虹」は、ただ静かにそれぞれが独自の色を放ちながら光り輝くだけではない。それは常にダイナミックに流動していく「大河」のように、歴史の流れの中で出会い、ぶつかり合い、その不断の接触の中から、新たな文明の形を生み出していく「移行と生成のダイナミズム」によって特徴づけられるのである。本書は、文明と文明の出会いが織り成すこのダイナミズムの意義を、国際社会の真只中に身を置いて思索を重ねてきた著者の深い哲学と幅広いワールド・ワークをもとに論じていく。

本書に収められた壮大な論文・エッセイ群が語る具体的な内容に踏み入る前に、ここでも、本書を通読して得られる、この書全体が紡ぎ出すひとつのメッセージについて触れておきたい。本書には、古くは一九七二年の執筆に遡り、著者がこれまでに書き溜めてきた論文の数々が収められているのだが、その構成は、いわば服部英二というこの比較文明学者の思想のあり方とその哲学が拠って立つ基盤を開示するものとなっている。中でも、その思想の根幹を最もよく我々に伝えてくれるのが、「温故知新」と名づけられた最終章に何気なく並べられた論文である。

ここで通例の書評スタイルに反して、最終章の解釈から説き起こすことをお許し願いたいのだが、この章には、服部氏が敬愛し

てやまない二人の思想家に捧げる文章が収められている。ひとり、氏がパリ時代から親しく接した哲学者のガブリエル・マルセル（一八八九—一九七三）、そしてもうひとり、四十数年前のこれもパリで、氏と席を並べてある講演に聞き入ったこともあるという文化人類学者のクロード・レヴィ・ストロース（一九〇八—二〇〇九）である。この二人は二十世紀フランスが生み出した偉大なる思想家であり、当時の思想潮流であった「実存主義」と「構造主義」をそれぞれ代表する人物である。

最初に登場する「ガブリエル・マルセルの想い出——その人と思想——」と題された服部氏の論文は、まるで一編の美しい小説のように、ありし日のマルセルを語るのだが、その美しい筆致は同時に、他のどんな表現よりも明確に、この哲学者の思想の輪郭を浮き彫りにしていく。氏は「ガブリエル・マルセルほど人間を愛した人を私は知らない」と語りながら、そんなマルセルにとって「実存」とはいったい何であったのかを問うていく。そしてその答えの手がかりを、マルセルの哲学の出発点である、人間の感覚や肉体を本質的な要素として得られた「拒みがたいもの」としての「経験」に見出すのである。存在の根源に、このような「感覚と肉体の大きな肯定」に基づく「経験」の概念を据える思想は、デカルト以来、西欧近代思想の中心であった心身二元論に対

する強力なアンチ・テーゼとなった。

かくしてデカルトによって断罪された感覚と肉体は復権し、現代哲学に大きな影響を与えることになる。いかなるものにも「還元できない」もの、そこから出発する以外にないもの、として捉えられた「実存」は、そのまま「生」であり「時」の中にあり、その故に動的なものである。(三二七ページ)

感覚と肉体によって捉えられたこの動的な「経験」から出発する時、マルセルにとつての「主体」は、もはや他者から孤立して存在する西欧近代的な「個(エゴ)」ではありえない。むしろそれは、存在のはじめから他者とともにあり、この他者との「共生・共成」の中に自己の生きる意味を見出す「相互主体性」(CO-ESSE)の概念に行き着くのである。服部氏は言う。

相互主体性—CO-ESSE—およそデカルトからサルトルに至る独我論を破った、そうしてそれだけでも哲学史上に光芒を放つこの概念の意義は、しかし、エゴの知的還元—フッサールの還元を含めて—を行う人には決して理解されないだろう。なぜならそれはまさしく「還元できぬもの」であるのだから。それは「経験」の本当の意味を知るもののみ理解されるに過ぎまい。しかしながら、ここに現代の人間にと

つての希望の地平が開かれていることを誰が否定できよう。

(三二五ページ)

マルセルのこの実存哲学は、我々を取り巻く世界をできる限り客観的に叙述しようとする「冷やかな知性」(この現代の思想状況を、服部氏はこのあとに続く「フランス思想界の現状—冷やかな知性の時代—」の中で批判している)からは程遠い。それどころか、彼の実存思想を支えていたのは、限らない「人間への愛」であり、その愛に満ちた哲学は、常に「人がいかに生きるか」という課題、すなわち「倫理」の確立と結びついていたことを、服部氏は重ねて強調する。「今思うに、ガブリエル・マルセルは、呼吸するように哲学した、と言ってよい。その生そのものが哲学であった。……そこには、avoir(所有)を脱して、être(存在)そのものに入ってしまった人の姿が見られたのである」という服部氏の言葉は、「哲学」、更に言えば、「学問」とは何か、という深い問いに対する氏自身の思想的態度を表明したものとさえいえる。

実は、マルセルが提唱したこの「経験」重視の思想は、実存主義へのアンチ・テーゼとして登場した「構造主義」の中にも受け継がれていることを服部氏は指摘する。その思想は、他ならぬ構造主義の創始者であるレヴィ・ストロースの中に生きているので

ある（「レヴィ・ストロース最後の講演」）。一般に構造主義は、「実存主義のパトスを放逐し、思考を生経験から分離」することによって、主観的実存よりも、それに先立って存在する、より客観的「体系（システム）」を分析対象とする冷たい「非人称的思考」と理解されがちである。これに対して服部氏は、構造主義を実存主義に代わる新しい哲学思想と位置づけるのは間違いであり、「それは着眼点を変えた新しい方法」に過ぎないと分析する。構造主義はその着眼点を、実存主義が探究した主観的自己から、客観的対象の「部分」へと転換したというのである。構造主義のこの「部分」へのこだわりは、研究者たちを「現場」へと赴かせる。このフィールド・ワーク重視の方法論を支えるのは、「現場に神宿る」という信念、すなわち、感覚と肉体を通して知る「経験」重視の思想である。服部氏の言葉を借りれば、現場から学ぶことによって「部分から部分間の関係が、そしてそこから全体が見えてくる」——この視点こそ、構造主義が現代思想にもたらした貢献のひとつである。

服部氏はレヴィ・ストロースのことを「行動する巨人」と呼ぶが、この呼び名は同時に、マルセルにもあてはまるであろう。というのも、マルセルにとっては、生きることそのものが思索することだったのだから。この二人の知の巨人に共通して言えること

は、彼らは深く「思索する人」であると同時に、「行動する人」であったということだ。だが実は、それは取りも直さず、服部氏自身の生き方を根底から支える思想的態度ではなかったか。服部氏の哲学思想は、まさにこの二者によって代表される「実存主義」と「構造主義」の止揚の上に成り立っているように思われる。服部氏は、前著『文明間の対話』において、次のように述懐している。

「思索人として行動し、行動人として思索せよ」と、かつてベルグソンは言いました。私が学生時代に知ったこの言葉は、私の脳裏に深く刻み込まれ、結局、私をして大学に残らず、国際機関に導くものとなった、と思われます。（『文明間の対話』、八ページ）

服部氏のこの想いは、京都大学の学生時代に氏が通い詰めたという（氏はこの思い出を、いつも大変懐かしそうに語られるのだが）、桑原武夫氏率いる京大人文科学研究所の伝統——「思考の獨創性」と「フィールド・ワーク」の重視——の中で揉まれるうちに、一層強固なものとなったに違いない。服部英二というこの比較文明学者は、まさに深く「思索する人」であると同時に「行動する人」なのである。

かくして本書は、服部氏のこれまでの「思索」と「行動」の軌

跡を、氏自身の「生の哲学」の表明として我々に提示する。第一章「地球システムと文明の通底」では、ユネスコを中心に様々な国際プロジェクトを手がけてきた服部氏の活動を辿りながら、「文明とは何か」という根本的な問いが、本書全体を貫く思想の骨格として論じられる。続く第二章の「文明の移行」では、文明と文明の出会いの様相が巧みに描かれ、そこに存在する「通底の価値」の探究が、服部氏自身の幅広いフィールド・ワークを通して具体的に展開されていく。第三、四章は、ここ十数年の間に、その時々々の社会問題に触れながら、氏が様々な新聞・雑誌に寄稿した諸論文を収め、最終章では、古くは一九七二年の執筆に遡って集められた哲学的論考を通して、氏の思想の根幹に触れる。

第一章「地球システムと文明の通底」で、服部氏は「世界史における文明像にはひずみがあったことを認識しなくてはならない」という指摘のもと、これまでの西欧近代啓蒙主義を基盤にした文明観がいかに歪んだものであり、どれほど文明同士の真の対話を阻んできたかを訴える。

啓蒙主義は……「理性」を人間の諸能力の頂点に立てたが、このことは全人的教育、人格形成にひずみをもたらすことになった。注意すべきは、このひずみが、同時に、差別の原理

となったことである。……これが同時進行中の植民地主義に正当性を与えた。すなわち、「未開のものたちをへ文明化する」と。「文明」とは、西欧啓蒙主義の生み出した理性中心主義、科学主義、それが可能にした物質的繁栄、それを支える資本主義制度のことにほかならない。(二六ページ)

更に、この「文明像の歪み」は決して過去のものではない、と服部氏は強調する。

「彼らはへ文明へに対して戦いを挑んだ」との東京裁判におけるキーンナン主席検事の言葉は、半世紀を経て九・一一事件に直面したブッシュ大統領の口からも発せられた。文明は西
欧文明、文明と野蛮、The west and the rest の虚構はそれほど根深いのだ。……自然を支配し、地球を略奪する権利が人間に与えられているかの如き錯覚はまだ生きている。理性に至上の価値を与えた十八世紀の啓蒙の時代に生まれ、直線の時間論に立脚した「進歩」(Progress)の概念は、現在の「自由と民主主義」と同様十九世紀西欧のキーワードであったが、それに疑念を抱いたボードレーが自らの文章を削除される憂き目を見たように、時代精神(Zeitgeist)というものは一たん動き出すとあらゆる批判を封じる働きをもつものである。(四三ページ)

しかしながら、この永遠の「進歩」という思想に基づいた文明観は、地球の側からの叫びによって、今や終わりを迎えようとしている。氏の言葉を借りれば、この進歩思想に対する無反省は、「化石燃料の発見に伴う驚異的な人口の増大となり、資源の略奪となり、エネルギー消費の爆発となり、今日の地球温暖化を招来した。そして地球は、この虚構を作り出した民族が内包した時間論に従って、彼らの忘却していた『終末』へと確実に歩を進めている」(二七ページ)。今や我々は、こうした西欧中心の歪んだ文明像を脱却し、新たな文明理解へと向かわねばならない。それは、これまでの文明観の前提をなしていた理性中心主義・直線的進歩史観からの脱却、更には、そこから生まれた差別の論理からの脱却である。

第一章に並ぶ数々の論文は、服部氏がこの思想運動の牽引役として国際社会で果たしてこられた役割の大きさと、氏の活動への情熱を我々に伝えて余りある。服部氏の発案により一九八五年にユネスコが着手した「シルクロード・対話の道総合調査」を皮切りに、氏は国際社会を相手に、一貫して、真の「文明間の対話」とは何かを問い続けてこられた。その活動は、一九九五年に東京で開かれたユネスコ創立五〇周年記念シンポジウム「科学と文化——未来への共通の道」を経て、二〇〇一年、ユネスコ総会が満

場一致で採択した「文化の多様性に関する世界宣言」において、ひとつの重要な成果を見る。この宣言の第一条に記された文言は、これまでユネスコの活動に大きな影響を与えてこられた服部氏の思想が、一つの確かな形をとって現れたものといえるのではなからうか。

文化は時代と場所に依りて様々な形態をとる。この多様性は、人類の構成する集団・社会を特徴付けるアイデンティティの独自性・多様性に具現化されている。交流・革新・創造性の源泉である文化の多様性は、人類にとって、生物界における生物多様性と全く同様に必要なものである。この意味において、文化の多様性は人類の共有遺産であり、現在ならびに未来の世代の利益のために認知され、主張されなければならない。(「文化の多様性に関する世界宣言・第一条」、本書四九ページ)

服部氏が評するように、「この宣言の重要さは、これまで異文化理解や寛容の対象とされてきた多文化の存在が、それどころか、自己自身の存在の不可欠の要因なのだ、と明示したところにある。自己は多数の非自己によって生かされている、との深い認識がここにはある」(四九ページ)。この氏の言葉の中に、我々は先に見たマルセルの CO-ESSE (相互主体性) の思想が生きて

いるのを見出す。文明はただ一文明のみによって存在するのではない。文明は他文明の存在を必要とし、他者との絶えざる交信によって新たな文明を形成してゆく。マルセルの「相互主体性」の概念は、ここで「他者に生かされる私」という認識に立った「文明多元論」へと発展するのである。

文明の多様性への理解を進めることは、世界で現在進行中のグローバリゼーションに対する批判へとつながる。このグローバリゼーションという名の文明の一元化は、たった一つの価値、すなわち「市場原理」というアメリカ的価値が、他のすべての価値を圧していく姿である。このアメリカ的価値を押し進めた現代の資本主義文明は、人々の「所有」を増大する一方で、その「存在」をすり減らしたことを、服部氏は警告する——「ガブリエル・マルセルがいみじくも指摘したように、人が何で『ある』かは、人が何を『もつ』かと反比例の関係にある。所有の増大は人間の存在をすり減らしていくのである」（一〇二ページ）と。この価値の一元化に抵抗し、あくまでも多様な生のあり方を尊重しようとするならば、我々は「所有」の原理を旨とするこの資本主義文明の本質をまず見極め、それを超えていく道を模索しなければならぬ。こうして、「文明の多様性」への理解を訴える服部氏の主張は、同時に、現代の資本主義文明の超克の議論へとつながっている。

くのである（「資本主義文明の超克に向けて——比較文明論の視点から——」）。

服部氏は、多様性を前提とする「文明間の対話」の意義について、次のように語る。

文明は衝突しない。文明に対する無知が衝突するのである。われわれは文化の多様性の中に互敬による共生、更に共働による「共成」を求めねばならない。……「文明間の対話」は、多分に文化の多様性を意識したものである。対話とは出会である。出会うべき、すなわち敬意を払いうる他者が存在しなければならぬ。「文明は出会いによって子を孕む」のである。すなわち文明の対話とは Mutual Enrichment であり Cross-Fertilization なのだ。それは〈共成〉である。〈合成〉ではない。いわんや〈交渉〉ではない。文明の核を形造る文化は、他文化の存在を要し、他者との絶えざる交信によって、新たな自己を形成してゆく。しかもそれは双方向でなされる。人類文明はこのような対話の中で成長してきた。（四五—四八ページ）

西欧の近代啓蒙思想がもたらした「歪んだ文明観」の超克を訴える服部氏の議論は、しかしながら、単純な西欧批判とそれに伴う自国文化礼賛主義には決して終わらない。「理性の西洋に対す

る神秘の東洋」という従来のナイーブな分類思考は、「東西」という対立軸を無反省に想定することにより、むしろ諸民族の出会いと連帯を阻んできた、と服部氏は警告する。この東西対立軸の設定による単純な他者批判によって、西欧そのものも曲解されることになった、と。むしろ我々は、単純な西欧近代批判を超えて、次のことに気付かねばならない。すなわち、明治維新のころ日本が出会った西欧とは、伝統的な西欧ではなく、既に過去に伝統との断絶を経験した共同体であった、ということ。

地球の上に流れた時から見ればまさに一瞬ともいべき近代の合理主義の時代こそ人類史に突出した異常な時代ではなかったか、この時期にすべての人類が深みにおいて分かち合えるはずの通底の価値が見失われたのではないか。(二一四ページ)

「文明」対「野蛮」、「西洋」対「東洋」、「普遍」対「特殊」といった虚構の対立軸を超えて、多様な文明の深みに存在する人類にとつての「通底の価値」、言い換えれば、「倫理の基礎」を探究すること——それこそが、比較文明学者の課題であると服部氏は強く訴える。そして、このすべての文明に通底する価値として氏は、「生命の循環と再生の思想」、「聖なるものへの指向」、そして「生に向かう存在としての人間把握」を挙げるのである。

続く第二章の「文明の移行」では、文明と文明の出会いの様相が巧みに描かれ、そこに存在する「通底の価値」の探究が、服部氏自身の幅広いフィールド・ワークを通して具体的に展開されていく。まるで地球を一周するかのような壮大なスケールで、世界中の様々な文明がひとつの糸で繋がれていく。その比較研究のスケールの大きさと思考の獨創性は圧巻である。パリのエッフェル塔は、「生命の循環と再生の思想」に対するヨーロッパ人の果てしない郷愁と絡まって、古代エジプトのピラミッドと結びつき(「エッフェル塔はピラミッドか?——文化遺産を結ぶもの——」)、中央ジャワで発掘されたボロブドゥール寺院は、スリランカ・ジャワ・長安・奈良を結ぶ南海の大乗仏教伝来の道の要衝に位置づけられる(「南海の大乗仏教の道——ボロブドゥールとアンコール文明をめぐって——」)。さらに驚くことに、このボロブドゥールに見出される「竜」を象徴とする「大いなる水の循環による再生の思想」が、その昔、東南アジアから海流に乗って太平洋を渡り、中央アメリカのマヤ文明に影響を与えたという大胆な仮説が、実証を伴って提示されるのである(「竜は太平洋を渡ったのか?——マヤ文明とインドネシア——」。まさに、文明は「生き物のように移行する」。そして各地で新しい出会いをもちつつ変身し発展してゆくのである。第二章では、その生き物のような文明の姿が、生き生きと描

かれていく。

第二章には、実はこの壮大なフィールド・ワークの山にはさまれるように、一編の哲学的論考が挿入されている。「多神教と一神教——『聖戦』の終焉に向けて——」と題されたその小編は、評者が今まで出会った「比較宗教学」の論文の中で、最も卓越したものの一つと言えよう。世界を大きく分ける二つの根本思想——「多神教」と「一神教」——の本質を、これほど明晰かつ端的に語った文章が他にあっただろうか。一神教文明によって、多神教は長く、野蛮な前近代的思考の産物と見做されてきた。ヘーゲルの弁証法史観が示したように、高度の近代的人間社会は最終的に、西欧文明が体得したキリスト教に代表される一神教（＝「絶対的一者」への信仰）に行き着く、と主張されてきたのである。服部氏の論考は、この「絶対的一者」の観念をめぐって「多神教」と「一神教」の本質を再解釈することにより、従来の議論を百八十度転換してしまう。

服部氏は言う。多神教の中に生きる日本人は、すべての神仏を区別することなく、その前で手を合わせる。欧米のキリスト教信者には、無知・無節操と見えるこの日本人の無意識の心底にあるものは、実は、「仏もまた塵」という理解なのだ、と。すなわち、様々な形をとって現れる仏達、神々も所詮は仮象に過ぎず、日本

人は、それらの形を通して根源的一者、すなわち「隠り身」の神を透視しているのである。日本人にとってのこの「聖なるもの」の観念を、氏は次のように表現する。

この一見個々に現れる霊の奥に大いなる一つの霊の存在が意識されるようになると、それは（オットーのいう）Das Heiligeあるいは（エリアーデのいう）Le sacréとなる。このヌミナ的なもの（Numinose＝神性）は創造主ではない。それは自然とともにある。それは天地を創り出すのではなく、天地の源泉にあり、壮大な生命の大河として「今ここ」に至っている。それは超越神ではない。その至高の一者、一なる霊と人間との間に断絶はない。そしてこのヌミナ的なものは、それが意識されているか否かを問わず、さまざまに姿を変え形を変えて出現するのである。それを「現し身」と表現してもよい。（二四〇ページ）

このように、多神教がその名に反して、「一なる神」への信仰を秘めているのに対し、一神教は逆に、「多なる神々」の存在を前提として初めて成り立つ、と服部氏は指摘する。この逆説的解釈により、一神教の、実はきわめて「多神教的な性格」が顕わされる。

ここで考えねばならないのが Religio という語のもつ本来の

意味「結びつき」である。すなわちそれは神とある民との「契約」であり、その契約によってその民はその神の「選民」となる。さらによく見ると、それは「神が民を選ぶ」のではなく、「民が神を選ぶ」行為である。すなわちある民が一つの神を唯一神として選ぶことにより自ら選民となるのである。「排他」の基本的姿勢はここに確立している。何故ならばその契約とは、神が他の神を排し、民が他の神を信じる他の民を排する誓約に他ならないからである。ここにこの一神教の極めて多神教的な性格が見て取られる。(二四四ページ)

服部氏のこの解釈は、一神教の祖型であるユダヤ教の本質を事に言い当てている。氏が指摘するとおり、「このように見ると、多神教といわれるものが実は一者の万象への顕現であり、『透視』という作用によって極めて一神教的な性格をもつのに対し、今まで一神教と呼ばれてきたものが、『争う神々』を前提とした、またその中で一つの神を『選ぶ』という行為を伴った、根本的に多神教の性格を帯びたものであることが理解され」るのである(一四九ページ)。この氏の議論は、一神教文明がこれまで主張してきた「多神教⇨多なる神々」対「一神教⇨一なる神」の前提を大きく覆す。しかしながら、ここで服部氏が真に目指すのは、単に従来の対立を新たなる多神教優位の対立に置き換えるこ

とではない。氏のねらいは、むしろこの不毛な対立を超えて、両文明の根底に共通に存在する人類にとつての「通底の価値」の探究へと、我々をいざなうことにある。

興味深いことに、この論文は比較宗教学の立場で書かれたものであるにもかかわらず、「宗教」という言葉がほとんど使われていない。「宗教」という語は、それが指し示す行為の本質を語るにはあまりにも抽象的すぎて、我々の心奥に届かないのである。服部氏はそのかわりに、ここで「祈り」という言葉を使う。

「諸々の生命系の中にあつて、人類の証しとは何か？ それは『祈り』をもつことである」という書き出しで始まるこの論文は、こうして「宗教」という抽象概念を、人間にとつてより原初的な行為である「祈り」という表現へと置き換えていく。服部氏は言う。「祈り」とは、人間存在を超える大きな力(「聖なるもの」)に対する人類の態度に他ならない。この「祈り」は、人類が形成した諸文明の中で様々な形態をとつてきた。「宗教学」とは、従つて、これらの「祈りの形態の多様性」を比較研究する学問と言換えることができる、と。

「祈り」をもつことは人類の証し、すなわちそれは、人類にとつての「通底の価値」といえる。その通底の価値たる「祈り」の形態を諸文明の中に探していく時、そこに、一神教か多神教かを

問わず、共通に見出されるひとつの原初的な形が存在する。それは、ヨーロッパや東アジアといった海の文明国に今でも幅広く見出される「豊饒の女神」への信仰、言い換えれば、「生命の母神」への信仰である。ここに我々は、人類にとってのもうひとつの通底の価値を見出す。それは、この「生命の母神」という象徴を通して表現される「いのち」そのものへの尊崇、「海と大地とを結ぶ大なる命の連鎖」への畏敬の念である。「今必要なのは世界的意味での新しい倫理であり生の規範である。しかもそれは宗教を超えたところに確立されねばならない」(三三四ページ)と、服部氏は強く主張する。文明間に存在する通底の価値の探究は、この人類にとっての「新しい倫理」と「生の規範」を明らかにしようとする試みに他ならないのである。

続く第三章の「論説」には、一九九六年から二〇〇六年にかけて、朝日・毎日・岩波等の各紙誌に発表された論文が、そして第四章の「エッセイ」には、一九九九年から二〇〇〇年にかけて、雑誌『れいろう』に掲載された論文が収められている。どの論考も強く心に響いてくるものばかりだが、中でも「エッセイ」に纏められた作品は、まさに「珠玉」という言葉にふさわしく、ひとつひとつが、知的密度とともに、芸術的密度の大変高い作品であるように思われる。

最後に、本書全体にこだまする服部氏の「音楽」について触れて、本論を締めくくりたいと思う。本論の冒頭でも述べたように、『文明は虹の大河』と題された本書は、様々な色に光り輝く文明が、まるでダイナミックな大河のように出会い流れゆくさまを描いた、一枚の「絵画」のようなイメージを我々に与えてくれる。が、それと同時に、本書を読み終えた時、評者の心に響くもうひとつのイメージがあった。それは「音楽」である。服部氏によつて紡ぎ出された言葉が、様々な音の調べを生み出し、互いに響き合いながら美しく壮大なポリフォニーを奏でている——そんなイメージが心に湧いてきたのである。これは評者の勝手な思い込みだろうか。いやたぶんそれは、服部氏の「言葉」に対する研ぎ澄まされた感覚と、そこから生み出される氏の言語表現の質の高さに由来するに違いない。服部氏の言葉は、いつも明晰さと美しさとを兼ね備えている。氏の言葉には、語ろうとする「事」の本質を顕わにする力とともに、その「事」の様々なありようを、言葉がもつ「音」とともに豊かに伝える力が宿っている。まさに、ひとつひとつの言葉が我々に「語りかけてくる」のである。実は服部氏自身が、本書の中でこのことに触れている。

「言語とは音である」ということを、私は学部で繰り返し強調してきた。「言語は文化そのものである。その文化に接し

ようとするならば、その言語の音とリズムの中に溶け込まねばならない。」(三四二ページ)

服部氏にとって、ある文化に接するということは、自らの感覚と肉体を通して、その文化の「呼吸」を感じ取ることだと言えるかもしれない。そして、その「呼吸」を最もよく伝えるのが、それぞれの文化が長い時間をかけて育んできた「言葉」だと言えるのではないか。ドイツの哲学者ハイデガーはかつて、「言葉は存在の住家である (Language is the house of Being)」と語ったが、これと同様の認識が、服部氏の「存在」と「言葉」をめぐる哲学の中に生きているように思われる。

こうして、本書の根底に響く著者の熱い魂の旋律を聴く時、私は、このような偉大な知性に今ここで出会い、学ぶことのできる幸福に感謝すると同時に、氏が指し示す「人類にとっての通底の価値」の探究に向けて、我々は更にしっかりと歩を進めねばならぬ、という思いを強くするのである。